The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ グリーンランド民話(七編)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 60, p. 65-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80931
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪翻　訳≫

グリーンランド民話（七編）

岡　田　令　子

SEVEN FOLKTALES FROM GREENLAND

Reiko Okada

In our journal No. 52 THREE FOLKTALES FROM GREENLAND are introduced for the first time, and this is the continuation of the same work.
They are:

4) Hjælpen fra innersuaq'er (p. 126)
5) Storfangeren, som døde af glæde ved at se solen (p. 198)
6) Den utro hustru (p. 151)
7) Øen Diskos flytning (p. 197)
8) Solen og månen (p. 127)
9) Om manden, som gerne ville havebørn (p. 159)
10) Den forladte kvinde med plejedatter (p. 113)

At the end the translator's comment is added, also this time, to each tale.

今回ここに翻訳を試みたグリーンランド民話は七編あり，これらは先に，本学報第五十二号（1981）に掲載された三編に続くものである。各民話に，訳者の解説をそえたのは前回と同じである。取りあげた七編は次の通りである。

(4)　岩の精の助け
(5)　太陽を見たうれしさのあまり死んだ立派な漁師
(6)　不貞の妻
(7)　ディスコ島を移すこと
(8)　太陽と月
(9)　子供が欲しかった男の話
(10)　置き去りにされた女とその養女

(4)　岩の精の助け

一人の老人が仲間の漁師たちと一緒に暮していた。年はとっていたが，まだまだ立派な仕事ができた。

彼はいつも大勢の者と海に出ていたのだが，ある日，強い北風が吹いたので，出かけたのはこの男だけだった。彼が一匹のあざらしにちょうどモリを打ち込んだその時，すぐ目の前を一そうの大きい，きらきらする白い皮舟（カヤック）が進んでいったが，それは今まで見かけたことのないものだった。この皮舟にのった見知らぬ人は，老人のそばへやって来て言った。

「一度，わたしのうちへ来てもらいたいのでこの間からお前一人に会いたいと思っていたのだ。いつもお前は誰かと一緒だったな。やっとお前だけに会えた。さあ，家へ来てくれ，案内するから。」

老人はその男についていった。とうとう大きな岩がいくつかあるところにたどりついた。すると，この見知らぬ男が老人にいった。

「この岩にぶつかると，岩が持ち上る。そして，わたしがその下へ入る。なにも考えないで，おまえもただついて来るんだ。あまり客がないものだから，おまえに来てもらいたかったのだ。明日の朝早く家に帰るとよい。」

岩はこの男がいった通りに持ち上って，彼が上手に滑り込んだ瞬間，老人もついていった。すると二人は小さな一軒家にたどりつき，女たちの出迎えを受けた。中に入ると，とても居心地よくしてあった。女たちは早速，鯨の皮のご馳走を二人にすすめた。

食事が終ると，この男―岩の精―は客にいった。

「おまえを招いたのは，話したいことがあったからだ。これから毎日，一人でここへ訪ねておいで。おまえが年をとって漁がうまくゆかなくても，わたしが助けてやろう。もし何か足りないものがあったら，わたしのところへ来るがよい。困ることのないようにしてやる。」

そこで老人は，その助けをいただきたいと答え，その日は岩の精のところで夜をあかして家に帰った。

この時から老人は目にみえて弱っていった。何かに困って岩の精を訪ねてゆくと，すぐに助けてもらえた。とうとう彼はすっかりおいぼれて，他のものたちみんなに，岩の精が何でもしてくれるのだといいふらした。長い間岩の精を訪ねなかったのだが，ある日，また出かけてみた。

すると，岩の精は老人に向っていった。

「昼間の住人には，もう充分なことをしてやった。」

それからというもの，岩の精は，この老人には来て欲しくなかったのである。

(5)　太陽を見たうれしさのあまり死んだ立派な漁師

東海岸のアルーク島にいた一人の腕の立つ漁師は，夏になっても全然家を離れようとはしなかった。彼は自分の家への愛着が強いことで仲間たちに知られていた。

彼には，何よりも，水平線の上に太陽が昇るのを見るというよろこびがあった。というのも，太陽は初め頃，何度も何度もちょっぴり姿を見せてはすぐ消えてしまうからであった。

とうとう彼に息子ができた。この息子が大きくなって，皆が夏の住居へ出かける時，この漁師も，他のものたちと一緒に行きたいという息子の望みには反対できなかった。

息子は結局父を説得し，みんなは西に向って移動しはじめたが，太陽が，海からではなく陸のかなたから出るところまで来るかこないうちに，父はもうこれ以上旅を続けるのはいやだと言い張って，他のものたちに，次の日にはもと来た方へ帰るように命じた。

みんながアルーク島に戻ってテントを張ると老人は朝早く外へ出ていった。彼らは最初，老人の声を聞いたのだが次の瞬間声がしなくなってしまった。外へ出て見ると，太陽が丁度水平線上にのぼり，それと同時に老人は倒れ，息たえた。うれしさのあまり死んでしまったのである。

(6) 不貞の妻

妻と二人きりで暮していた男は，どこへ行くのか知らないが妻がただただ出かけてゆくのに気がついた。男が家に帰って来ても妻はめったに家にはいなかった。

疑いをもった夫は，ある朝遠くへ行くように見せかけ，近くの岬のまわりを漕いだだけで陸へ上って身をひそめていた。すると妻は一番良い着物を着てテントから出て来た。夫は妻の後をそっと湖のところまでつけていった。すると妻は着物をぬいで水に入っていった。これにはにがにがしい思いをさせられた。夫は土の上をはいまわっている虫を一ぱいよせ集めておいて，ある日，妻と二人だけの時に，この虫を妻の体につめて殺してしまった。それからというものたった一人になってしまったが，いつものように皮舟（カヤック）にのって仕事に出かけた。

ある時，皮舟にのって誰もいないテントに帰ってみると，おかしなことに料理した食事や蒸した肉が出ていたが，誰の姿もみえなかった。次の日，家に帰った時も同じだった。蒸し肉が出ており，皮の長靴は乾かしてちゃんと手入れがしてあった。こんなことが毎日つづいた。

ある日，男はちょっと漕ぎだしただけで，そのまま陸にあがって，身をかくし，テントの方を注意していた。すると頭を高く結った小さな女が岩山から下りて来て，テントの中に入った。大急ぎで皮舟をこいで戻り，陸に上ってそおっと近くまできて，テントの入口の布を上げた。するときつい嗅いがして，中には美しい女がいて，ランプの掃除をしようとしていた。それは人間の姿をした狐であった。男はこの女を妻にした。

ある日，男は皮舟にのっている従兄に会ったので，新妻のこと，その愛情のことなどを話し，彼女に会いに来るようにいった。「ただし，」

――男はつけ加えていった――

「彼女がきつい嗅いのあるのに気付いても，そのことは口にしないように，」と。

すぐに従兄は男について来た。二人は陸に上って，家へ向った。客は新妻がよく気がつくことがわかると，うらやましさが先に立ち，

「このいやな嗅いはどこから来るんだね。」といった。すると妻は立ち上った。彼女にしっぽが

出て，それでランプを消して，

「コン，コン，コンコン」と狐のなき声を立てながらテントからでていった。男はすぐに彼女の後を追ったが，外に出ると，彼女は狐の姿で急いで走り去った。追っかけてゆくと，穴の中へ入ってしまった。

人の話では，男が穴のところに立って彼女を呼ぶと，彼女は最初にカブト虫を，次には，蜘蛛を，それから一匹の虫を出して来た。それで最後に男は怒って穴の口をふさいで，焼き殺してしまった。こんなことのあった後，男はまた一人ぼっちになったが，ついに半狂人になって，自殺してしまった，ということである。

(7)　ディスコ島を移すこと

南の方に非常に高い島があった。これが住民たちの漁場へゆく道をじゃましていた。それで漁民たちはお互いに，こんな風に話し合っていた。

「あの島全体を何とかして，すっかり取り払ってしまったらどんなものだろう。そうすれば漁場へはまわり道をする必要もない。それには，ただ魔法の歌をうたえばきっとうまくゆくにちがいない。」

その時，二人の老人がいった。

「綱で引っぱってみたらどうだろう。」

キヴィアリッタヨークの方は，

「それは面白い！　おまえたちが綱で引っぱるのなら，わしは陸の方から捕えていよう。」

といった。

ある天気の良い朝，ニヴィンガシレルノオックとニックイフォルスークがいった。

「じゃ，ともかく綱で引っぱってみようじゃないか。」

二人は他の方法もないので，赤んぼうの髪の毛を一本抜き取って，それを引き綱として使うことにした。一方，キヴィアリッタヨークの方は，銅の細引きで陸の方から引っぱることにした。そこで彼らは，この大きな島に穴があくようにと呪文を唱えているうちに穴があいてきた。髪の毛と銅の細引きに魔法の歌をうたってやると，それがだんだん太長くなってきた。そして丈夫になると，それらを穴に通して歌を繰返しながら皮舟（カヤック）にかたく結びつけた。その外側で魔法の歌をうたって，動かそうと頑張っていると，「バーン」という大きな音がして，島が海底からはずれたのだが，キヴィアリッタヨークが陸の側からしっかり引っぱっていた。それで両方から一生懸命引き合うと，髪の毛の方は，ますます強くなって縮まっていったが，陸からの綱の方は，反対に，だんだん細くなっていったかと思うと，とうとうプッツリと切れてしまった。それでニッフィフォルスークとニヴィンガシレルノオックはなおも歌いつづけながら，どんどん島を引っぱって岸からずっと離してから，そのあと海岸に沿って北へ北へと引っぱっていった。

すると，クウノークの高い岩山から歌声がしてきて，これからは，この岩山が南部で一番高くなったと名のりをあげていた。

二人はずんずん北の方へと島を引っぱり続け，夜になってはじめてイルシサットの沖合で止め，そのままにしておいて，自分たちは夜中にまた南の方へ戻っていった。

こんなことがあったもので，ケケルタールスアック（すなわち大きな島――ディスコ島）は今日では陸から離れて北の方にあるのだ。また，この島がその方向に引かれていったため，海岸沿いの海はしっかりした底になっているのだ。

(8) 太陽と月

子供たちが夏の旅に出てしまったので，年寄り夫婦が取り残された。

ある日，夫が皮舟（カヤック）で出かけていったので，妻はたった一人で留守番をしていた。すると，誰か入って来る気配がしたので蒲団の下に身をかくした。少ししてから，そっと蒲団を上げてのぞいてみると，ゆきほおじろが家の中に入っていた。それが外に出る時，こんなことをいい残した。

「お前に何か話したいという人がやって来るよ。」しばらくして，前よりも大きな物音がしたので，妻はまた蒲団の下にもぐり込んだ。また誰か入って来た。のぞいてみると，ゆきつつきだった。それが床の上をぴょんぴょん跳びながらいった。

「お前に何か話したいという人がやって来るよ。」この鳥が出てゆくと，同じようにして今度は一羽のわたりがらすが入って来た。

わたりがらすが出ていった時，妻は人間の足音のようなものを聞いたのだが，今度は一人の美しい女が入ってきた。そこで妻は，この見知らぬ客に，一体だれかと尋ねたところ，その人は次のような話をした。

「昔は，わたしの家では大勢のものが集って遊びましたよ。夜になって遊びが終ると，わたしたち若い娘はそのまま外にいたのです。すると若者たちがついてきて結婚してくれと頼みました。だけど，暗闇の中ではそれが誰かわかりませんでした。ふと，求婚しているのが誰か知りたく思いました。それで，外へ出る前に，わたしの手にすすを一ぱいぬりつけたのです。遊びが終ると一人が結婚を申し込みました。わたしは彼の背中をなでてから，彼をはなし，家へまっ先に帰りました。他のものたちが入って来て，毛皮の上衣をぬぎましたが，何もついていません。最後にわたしの兄が入ってきました。兄は白い毛皮をきていたのですが，それをぬぐと，背中一ぱいすすがついていました。そこでわたしは砥石でナイフをといで乳を切り取ったのです。それを兄にやって，『わたしの体全体がそんないい味がするのなら，これを食べてごらん。』といってやりました。

兄はみだらなことを口走りながら，わたしを追っかけて来たのです。わたしは跳び上りました。

その時，兄はよくない方の苔を掴んでランプに火をつけたのですが，わたしは良い方の苔をとって同じようにしました。彼は外へ走って出たので，わたしは追っかけました。気がつくとわたしたちは空中に持ち上げられていました。わたしたちが高く昇っていきますと，兄のランプが消えました。兄は月になりましたが，わたしのランプは燃えつづけ，わたしは太陽になりました。

そこでわたしは急いでみなし子たちを暖めようと――夏が来るようにと――どんどん高く昇っていきました。

最後にこの美しい女は次のようにつけ加えた。

「おまえの目を下にやってごらん。」

妻はその目を床にやった。すると，その瞬間，美しい女が出ていくのを感じたので，また目をあげてみると，女の背中がどくろになっているのが見えた。彼女がいってしまうと，外で物音がした。それは帰って来た夫の足音だった。

(9)　子供が欲しかった男の話

ある年寄り夫婦がとても子供を欲しがっていた。とうとう夫は石女にきく薬を探そうと北の方へ皮舟（カヤック）に乗って出かけることにした。どこへ行っても，会う人ごとに，子供をつくるのによい薬がないものかと尋ねてまわったが，誰もそんなものは知らなかった。ついに彼は北の端までやって来たのだが，何の手がかりもなく，やむなく，また家へ帰っていった。

次の年には南の方へ薬を探しに出かけた。そこでも人々にきいてみたが，誰も彼を助けることはできなかった。

持って来た食べ物がなくなってしまうと，途中，人の助けで何かを口にし，どんどん南へと旅をつづけた。やっと南の端まで来て，この男はいつものようにひとの家へ入って，子供をつくるのに何か良い薬はないものかと尋ねたところ，一人の老婆が答えて，

「わたしがもっているよ。それをおまえさんにあげよう。」

というと，袋を取り出して包みを開け，底の方から乾いた魚（アンマサツタ）――雌と雄――を取り出した。老婆はそれをこの男に渡して，

「もし，おまえたち，娘が欲しかったら，子持の雌を奥さんに食べさせるがよい，男の子が欲しかったら雄の方を食べさせるがよい。」

といった。薬をもらった男は妻のいるところへ急いで帰ることにした。しかし，途中で持っていた食べ物が底をついたので，食べてはならない二匹の小魚の一匹――子もちの雌――を食べてしまった。

道みちすでに腹がおかしくなった。男の胴がだんだん太くなって，乗って来た皮舟に体が入ら

なくなってしまった。そこで最初にやって来たテント村にとどまらなければならなかった。そのうちに男は妊娠しているのだとわかった。そこには産婆がいた。この産婆は，まわりにいた人たちに，死んだ雷鳥の足の骨を持ってくるようにたのんだ。しばらくしてから一人のものが，言われた通り，鳥の足の骨をもって帰って来た。すると産婆は，自分の住んでいたテントの床に敷いてあるタイルの下にいた何匹かの青い色をした虫を集め，妊娠した男の体へそれらのものをこすりつけて出口をつくると，女の子が生まれた。

男は娘が小さい間はその地にとどまっていたが，この子が少し大きくなったので妻の元へ帰っていった。さて，残された女の子は，生れた村で成長していったのだが，話しができなかった。話せないまま大人になったが，美しかったので，その土地にいたただ一人の青年が彼女を妻にめとった。しばらくして娘が一人できたが，やはりこの子も話すことができなかった。母親の方は自分が海岸でおっとせいの皮をはいでいる間，娘の世話を祖母にまかせていた。その日もまた，同じように仕事をし，夫も皮舟で海に出かけていた時，子供が泣き叫んでいるのを聞きつけたので，見にゆくと中指から血が出ていた。母親が子供を両手にかかえているうちに出血がもとでこの子は死んだ。

父親が海から帰って来て，娘のことを尋ねても説明できるものは誰もいなかったので父親はがまんならなかった。次の子も女の子だったが，上の子と同じ運命にあった。三人目は男の子だった。父は，このよろこびをどのように表わしたらよいかわからなかった。夕方，家に帰ると，その息子をだいて，寝る時まで一時も離さなかった。朝も同じで，目を覚してから，皮舟で海へ出かけるぎりぎりまで息子をだいていた。それなのに，この息子もまた，上の二人の娘と同じようになってしまった。ある日，父親が仕事に出て，祖母が子供の世話をしているうちに，母親は子供の泣き叫ぶのを聞いた。行ってみると，また中指が切られ，出血がもとで，子供は母親の腕の中で死んだ。海から帰った父親は，誰も説明できないので，すっかりかんしゃくをおこして妻にいった。

「子供がいるのに，しゃべれないとは，はずかしいとは思わんのか。もうここにいる用はない。出て行け！」

妻はすぐ出てゆく用意をした。そして家を出るやいなや夫の方をふり向いて，初めて口をきいた。

「おばあさんが，子供たちの中指を切ったんですよ。それで子供がみな死んでしまったんです。」そう言うなり，どこかへ姿を消して，陸地の奥へ入っていった。

海岸から遠くはなれた奥地の高い岩山へたどりついた妻は，大きな石の上に三羽の渡りがらすのようなものが止っているのが目についたので近づいてみると，それは人間だった。すぐそばまで行ってみると，これが自分の子供たちだとわかった。二人の姉たちは弟と手をつないで，三人は中指でボール遊びをしていた。

母親は息子を皮の子守袋に入れ，女の子たちの手をひいて夫のところへつれて帰った。

それから一家は睦まじく暮した。妻は口がきけたし，これ以上，子供をなくすこともなかった。

(10) 置き去りにされた女とその養女

身寄りのない女が，幼い女の子を養女にして，腕利きの漁師の家で世話になっていた。この女は漁師のいうことにはいつも従順だった。

ある年の春，村中の者は魚（アマサツト）を獲るために冬の住いを次々とはなれ，ついにみんなどこかへ行ってしまった。だが腕利きの漁師だけはまだそこに残っていた。彼は何か良くないことを企んでいたからだった。

風のない静かなある朝，この漁師は家の外へ出たのだが，すぐ戻って来て，

「さあ，出発の仕度だ！」

といった。彼と女は荷物をまとめ長旅に出る用意をしたが，一人者の女の方が早く仕度ができ，この時ほど感激したことはなかった。女は寝床の敷皮を除いて少しばかりの物を皮舟（カヤック）にのせようと，何度も行ったり来たりして荷物を運び込んだ。急いでその敷皮を取りにいき，持って下りようとした時，養女が海岸に突っ立ったままこの家の主人をみつめていた。女が荷物を下ろそうとした時，漁師は皮舟に跳びのり，すぐそれを岸から押し出して，

「おまえらは，わしの分も食っておけ，わしは，もうおまえらを連れてゆかん。」

と言った。そして，一緒に暮していたこの男は二人に背をむけ，沖の方へと漕いでいった。ほんの少ししかない家具のすべては皮舟につみ込まれ，敷皮が一枚残っただけで，ボートが遠ざかるのを見ていた継母とその養女は互いに向いあったまま，大声で泣き出した。沖へ出てしまった男の姿が見えなくなった頃，継母は涙を流すのをやめて娘にいった。

「こうやっていても何もならないから，もう泣くのはおよし。」

女の子はそれでもすぐに泣きやむことはできなかった。やっとのことで，この子は継母のいったことをききわけたので，彼女はその娘（こ）にいった。

「さあ，住む家を探すことにしよう。」そこで二人は海岸から離れ，あちこちの家を見てまわったが，どの家もみな壁から屋根布が取りはらわれてしまっていた。

とうとう二人は，まだ壁がそのままになっている二つ窓のついた家を見つけた。

「この家の南側に寝起きしよう。」

と娘にいって，板の間の上に，二人が暮すのに丁度いい大きさの仕切をつくって落ちついた。夜になったが，それまで二人は何一つ口にしていなかったので，また，継母は娘にいった。

「皮はぎをするところへ行ってみよう。何か落ちているかも知れないからね。」

そして，娘の手をひいて村のものたちが獲物の皮をはいでいたところまでやって来た。そこにはほんの小さな脂身の切れっぱしや皮が散らばっていた。二人はそれをかき集めて家に持ち帰っ

て食べた。それから板の間の上に横になったものの夜具もそろっていなかったので，寒さのために一晩中ねむれなかった。

次の朝，太陽が出て，暖かくなり始めると，二人は外の日だまりへ出たが，食べ物らしいものは何も口にしていなかったので，寒さのためにがたがた震えた。昼近くなって継母はまた娘にいった。

「雪がとけている皮はぎ場で何かの肉の切れっぱしでも探そうね。」

継母は娘の手をひいて，一番近くの皮はぎ場へ行ってみたが，何一つ落ちていなかった。次のところへいって，継母が雪を掘りおこしている間，娘は他のいくつかの場所をさがした。すると，何か赤いものが雪の中からのぞいていた。一体何だろうと思って近づいてよくみると，すっかり乾いた内臓のかけらだった。娘は継母を呼んだ。

「来て下さい。お母さん，ちょっとばかり，ぞう物をみつけましたから。」

継母は急いで娘のところへかけつけ，小さな切れをみて，

「まあ，本当に今度こそ御馳走にありつけたね。」

といって，雪の中から掘りおこしてみると，あざらし一匹分のはらわたがみえてきた。それを引っぱり出して二人はすぐ食べ始めた。継母はしばらくして食べるのをやめ，そばで食べ続けている娘にいった，

「あんまりがつがつ食べるのはおよし。もうそれぐらいでやめるんだよ。」

そこで娘はいつものように継母のいいつけを守った。二人は残りのぞう物をとっておいたが，その後は，何も見つけることはできなかった。

春になって，ちょうどあざらしがやってくる頃になった。二人は残りのぞう物を食べたが，朝にちょっぴり，夕方にも最後の一切をちょっと一口食べただけだった。すると，継母は娘にいった。

「おまえはまだわたしより動けるから，窓べりの板の間の下に一つ穴を掘っておくれ。」

娘はいままでこんなにはやく言うことをきいたことはなかった。一生懸命にやわらかい土に穴を掘り始めた。それをみた継母は穴をもう少し拡げるようにいいつけた。大きくなると，もっと深くなるまで掘り下げ，深くなると，また，

「おまえは，わたしより元気だから，さあ，今度はこの穴に水を一ぱいはっておくれ。」

といった。娘は海水を汲んで穴に何度も運んだ。娘が疲れてくると，休んではいけないといい，娘は，とうとう穴を水で一ぱいにしたが，終った時はもう夜になっていた。ついにその夜，最後に残ったはらわたの一切を口に入れて眠りについた。しかし，どんなに眠ろうとしても眠れず，ほんの少しうとうとしただけだった。

夜があけ始める頃，継母は娘にいった。

「ほとんど効きめがないとは思うのだが，それでもお母さんは，ちょっとおまじないをしてみようと思うのだよ。」

娘はそんなことを信じようとはしなかった。全く信じられないことなのだったから。彼女はそれで娘にいった。

「わたしがお祈りをとなえ出したら，おまえはわたしのいうことをよく聞くのだよ。」

継母は何かわけのわからぬことをさかんに言い出した。そうして娘をすっかり魔法にかけてしまい，娘がいうことをきくようになると，水の方でぴちゃっというもの音がきこえた。すると，娘がいった。

「お母さん，お母さん，何か水の中でぴちゃっという音がしますよ。」

そこで継母は娘に，水の方へ行って何が起ったか見てくるようにいいつけると，娘はとび上って走っていった。そこにおこぜが一匹いるのをみつけた。

「お母さん，お母さん，おこぜが一匹いますよ。」

といった。すると継母は，

「古い砥石をそれに投げつけるのだよ。」――多分，お守り――

といい，娘は石を投げつけ，おこぜを殺した。二人はそれを真中から切って茹で，半分は夕食のために取っておいた。魚の頭をたべて，はじめて母と子は体があたたかくなってきた。夕方には胴の方を茹でて食べ，その後，ぐっすり眠ったので，もう寒さは感じなかった。

次の朝早く，継母がおまじないをとなえ出した時，今度は娘の方も本当にして，きき耳を立てると，何かがはがれるようなぴちぴちという音がきこえた。

「お母さん，お母さん，何か，はがれるような音が水の方でしますよ。」

と娘がいうと，

「行って見てきてごらん。」

といった。行ってみると石くい（ひらめ）が一匹いた。継母は，

「古い砥石を投げつけてごらん。」

といい，娘は言われた通りにして，魚を殺し，母親のところへ持っていった。何と卵が一ぱいつまっていたことか！　卵の半分は煮つけた。皮の半分は生のまま食べた。これでやっと満腹するまで食べられた。おこぜとは別物を口にしたのだから。

次の朝も，また継母はまじないをとなえ，母親の力がわかってきた娘は，熱心にきき耳をたてた。すると今度は羽ばたきの音がきこえた。それで娘は，

「お母さん，お母さん，あっちで羽の音がきこえますよ。」

といった。

「行って見てきてごらん。」

見にゆくと一羽の毛綿がもだった。

「大へんなごちそうですよ。毛綿がもがいますよ。」

と娘はいった。

「あの古い砥石を投げつけて！」

毛綿がもを殺し，まだ温いうちにその血を飲んだ。昼間に一部を煮ておき，晩にそれを食べて横になると，本当に体がぽかぽかして，よく眠れた。それというのも，今度は毛綿がもの毛を板の間の敷物にしたからだった。

次の日もまた，継母はおまじないをとなえた。娘は一生懸命になって聞いた。一体今度は何が出てくるのかな，と聞き耳をたてていると，息づかいの音がきこえてきた。

「お母さん，お母さん，息づかいがきこえます。」

「行って見てきてごらん。」

見に行くと，フィヨルドにいるあざらしだった。立ち上りもせず継母は，

「あの古い砥石を投げつけてごらん。」

といい，娘は石を投げつけてそれを殺した。引き上げて皮をはぎ，そのほんの一部分を食べた。やっとこれで二人は物もちになった。夜になって二人は，はいだ皮で蒲団ををつくった。もう床の敷物はあったのだから。

次の朝，また，継母はおまじないをとなえると，娘はこれを聞いていた。

「お母さん，お母さん，荒々しい息づかいがきこえますよ。」

「行って見てきてごらん。」

そこへ行ってみると，横腹の黒いあざらしがいた。娘はふりむいていった。

「なんと，横腹黒ですよ。もう食べ物はどっさりありますね。」

「あの砥石を投げつけて！」

娘は石を投げ，それを殺した。それを小さく切っただけで少しも食べずに貯蔵用にとっておいた。

昼間，二人は急いで皮を乾かし，夜にはそれを床の敷物にし，前からあったものをかけ蒲団に使い，これでいよいよゆったりした暮しができるようになった。夜の眠りから覚めると，また継母はおまじないをとなえ，その間，娘は注意深く聞いていた。すると，短い息づかいがきこえてきた。

「お母さん，お母さん，短い息づかいがきこえますよ。」

「行って見てきてごらん。」

見にいくと，小さないるかがいた。

「脂身を食べただけのことがありましたね。ほら，今度はいるかがいますよ。」

「あの砥石を投げつけて！」

娘はいるかの頭に石を投げて殺した。脂身をほんの少し食べたが，その時は肉の方には手をつけず，あり余ったのであとで家の外へ出した。

これで本当に沢山の貯えができた。

次の朝また，継母はおまじないをとなえた。娘が聞き耳をたてていると，ずしんずしんとあたりが揺れ始め，水の穴全体から息づかいがした。

「お母さん，お母さん，恐ろしいような息づかいがしますよ。」

「行って見てきてごらん。」

娘が行ってみると，大きな白鯨だった。継母はいった。

「あの古い砥石を投げつけて！」

娘が投げつけると白鯨は死んだ。大へんな物もちになった。一日中二人は皮をはぎ，夜おそくなってやっと仕事を終えた。

夜の眠りから覚めると，継母はそれで充分とは思わず，また，おまじないをとなえ始めた。彼女がとなえ，娘が聞こうとすると，家中一ぱいになるような息づかいがしたので娘は逃げ出しそうになった。

「お母さん，お母さん，何ともひどい息づかいですよ。」

「行って見てきてごらん！」

みると，それは強い歯をした一角（いるか科）だった。

「その古い砥石を頭に投げつけて！」

娘が石を投げつけると身動きもせずすぐ死んでしまった。この小さな砥石はすばらしい偉力をもつことがわかった。一日中かかって皮をはいだが，追いつかないまま夜になり，仕事が終ったのが次の日の朝だった。

こんな風に二人が皮はぎを終えたあと，夕方近くになると，家の前に貯蔵用の食物が山と積まれていた。夕方，二人は南向の平たい岩のところまでいって干し肉にするため，細長く切り始めた。その時，娘が大きな声で叫んだ。

「あそこに見えるのは，一体何かしら。どうも皮舟のようだわ。」

そこで，その方をじっとみると，本当に一そうの皮舟だった。二人はそれが近づいてくるのを待っていた。

一人暮しの女には，親戚に年寄りが一人いるということだった。気の毒な老人は，自分の身内の女が，一緒に暮していた男に，がらんどうの家に残されたことを噂に聞いたので，もう，女は餓死してしまっているだろうとは思ったが，おこぜを土産にもってやって来たのだった。それが，近づくと，家の周りが血に染まっているのを見て，これはただごとではない，化物沙汰だと思った。しかし，もうとっくに餓死したとばかり思っていた者が，南向きの岩山の上で肉の切れを干しているのが目に入った。継母と娘は仕事の手を休めて，老人の方へ歩いて行くと，老人は，

「おまえらはもう死んでいるだろうから，埋めてやらねばと思って出かけて来たのだ。」

といった。女は，

「とんまの間抜け―，何を考えているんだね！　上って来て脂身でもおあがり。一角もあるし，白鯨もあるから，好きなだけ食べておくれ。」

と答えた。この気の毒な老人は陸へ上ったが，自分の皮舟をきちんと置くまでは一切れも食べようとはしなかった。肉切れを煮てやると，老人は腹一ぱい食べた。そして老人はその日のうち

に帰りたく思った。それで，皮舟も沈みそうになる程お土産をどっさり持たせて帰した。岸を離れる時，彼は，

「もう，おまえらのことは心配する必要がなくなった。困ることもないだろう。干し肉を食べ終った頃にまた連れに来てやるからな。」

といった。老人が行ってしまうと二人は寝床に入った。

次の日，また，この女がおまじないをとなえた。娘が聞き始めたが，今度は何もききめがなかった。息づかいも，ぴちっという音もきこえなかった。なぜかというと，魚や獣たちは，他人に分けられてしまったことで大そう腹を立てていたからだった。

それ以後というもの，いくらおまじないをとなえても，全然ききめはなかった。とうとうこの女はまじないを言うこともすっかりやめてしまった。もう，この彼女のまじないも魔力を失ってしまっていた。貯えてあった沢山の食べ物もなくなってしまった頃，あの気の毒な老人が二人を迎えにやって来た。それで，この女は彼の家で死ぬまで世話になり，一人ぼっちになることもなかった。

訳者解説

(4) 岩の精の助け

〝岩の精〟と訳した〝インネルスワク〟(innersuaq) という語には，テキストにした *ESKIMOISKE EVENTYR OG SAGN* には，註がつけられていて（202ページ）〝海辺の岩山に住む超自然的な生もの〟となっている。

この物語をよんでいると，龍宮を訪ねていく浦島太郎をふと思い出すのだが，この皮舟（カヤック）を乗り廻して漁をするエスキモーの漁夫は亀を助けたために海の下にある宮殿へ招待されるのではなく，彼が勇気のある立派な働きものであるためのようである。

エスキモーの社会のシャーマニズムについては，極地調査にあたったデンマーク人，クヌー・ラスムッセン（1879－1933）の報告として次のように述べられている。

「…村人がなんらかのタブーを犯したことによって，海洋を支配する〝海の神〟タカナカプサルクの機嫌を損じると，海の獲物は激減し，村人に病気が蔓延して村が恐怖状態になるため，シャーマンは万難を排して海底の女神を訪ね，彼女を慰撫しなければならない。海底の女神の家に辿りつき，女神に謝罪したのち村に帰ったシャーマンは，村人の中でタブーを犯した者を探しだし，罪の告白をさせる。完全に罪が告白されると，女神は機嫌をとり直し，抑えていた海獣や魚類を放ち，奮った病人の魂を戻すという。…」（佐々木宏幹著「シャーマニズム」（中公新書）14ページより）

上の引用によって明らかなように，エスキモーたちにとって大切な海からの獲物は，〝海の神〟

の意の下におさえられていると考えられている。この物語では，海の神を怒らせるような事柄は，漁夫の海底訪問以前には何も述べられておらず，日常の彼の努力と勇気に報いてやろうとの海の神の心づかいから，彼は海底へ導かれてゆくようである。

宮殿などという，きらびやかなものが現実の地上にない土地柄のことであり，訪ねて行った先も極めて素朴な描写になっているが，御馳走が出たり，女性が出迎えたりしているところからみて，ひょっとすると，地上よりも〝良いところ〟のようである。

ここを訪ねた老人が，この海の底で獲物を沢山獲れるように援助が与えられるということは極めて象徴的である。水の中，海底などで表わされるのは，われわれの心の深いところ，日常気がつかない無意識の世界を指していると考えることはできないだろうか。

〝岩の精〟で代表される超自然的な力，援助といったものは，何か重要な問題に出会うと，自分でも考えられないような底力が出て，その困難な問題を解決することができるといった時の心の状態にも似ている。〝海の底〟は，このような力の源泉を表わしている。

前述のように，エスキモーたちが常に，漁ができ，獲物があるということは，超自然の力，〝岩の精〟のおかげと心得ていると思われるが，そのおかげを感ずることができるのは，大勢のものと一緒にいる時ではなく，自分一人でいる時であったとするこの物語の部分にも意味がある。人間が自己自身と対話する時の心の状態を示しているように思えるからである。この自己にただ一人で対する時，人は心の中に秘密を持ち，それを大切にするところに，正しい判断力—勇気—をもちつづけるということでもある。

〝岩の精〟との約束を守れないほど老いぼれてしまった男は，大切な秘密を自分の心の中に持つことができなくなってしまう。すると〝岩の精〟は，「昼間の光の中に住んでいる者…」と老人を呼ぶ。（この言葉は非常に興味深く思われる。）これは暗に，秘密，暗い部分をもたないで，緊張を失ってしまった，すなわち，あさはかな人間ども，という意味かも知れないが，ともかく〝岩の精〟はこの老人には，あいそうをつかし，見放し，援助を断ち切るのである。

これは海の上の世界（意識上）の出来事としては，老人にはもはや海に出て仕事をし，漁ることが不可能になる。すなわち，何が大切かを判断できなくなった者に対しては，〝岩の精〟の恩恵はもはやなく，底力，勇気をなくしたエスキモーは，荒々しい海に皮舟を出すことはできない。エスキモー男性としての最も大切な任務を放棄せざるをえなくなる。そのような老人の心の経過を物語る興味ある物語としてこの話を読むことができる。

(5)　太陽を見たうれしさのあまり死んだ立派な漁師

一年の大部分を，暗く，そして冷い氷の世界で過さなければならないエスキモーたちにとって

の太陽は，はかり知れない意味をもつであろうことは想像にかたくない。それは，生きとし生けるものを閉じ込めていた自然が，その厳しい手を弛め，彼らにほほえみかけてくれることであり，光が大地を照らしはじめ暗黒の世界が消える時でもある。そのよろこびは誰にとっても何にもたとえがたいものであろう。そのよろこびの一端を，最も強烈な形で表現したのがこの物語であろう。

人は何らかの悲しみのために死ぬということは知っていても，常に頭上に太陽がみられるわれわれにとっては，その太陽をみるよろこびも人を殺す程，強くあり得るということは経験しにくい。

よろこびも，悲しみと同じように，人の生命を奪ってしまうほど力強いものであり，海のそばに住むこの物語の主人公の老人が，毎年見なれた形での日の出を何よりもよろこびとし，住みなれた故郷とその自然に限りない愛情をそそぐ有様が，素朴で美しい，力強い感情として表わされている。

(6) 不貞の妻

人間以外の動物，魚，鳥などを妻にする男のテーマは，広く東西の民話にみられるものである。

この物語では狐妻であるが，これを心のもつイメージとしてみる時，男性の中にある，〝アニマの像〟としてみることも可能であろう。

このような人間でないものを妻にした男性は，彼の側で，充分彼女の性格や，本来の姿をよくわきまえていないと，夫婦関係はつづかない。妻はいつでも，すきがあれば本来の姿になって逃げていってしまうからである。この物語では，妻はいやな嗅いをもっていることを誰かに指摘されると，もとの狐の姿になってどこかへ行ってしまう。これは〝アニマ〟（男性の心にある〝女性性〟）は――ひょっとすると現実の女性性も――非常に気分的なものであり，いつもたしかなもの，として捕えておくことの困難さを示しているのかも知れない。

また，この物語は，原始的な自然の中での生活では，人間と動物，地を這う生きものなどと密接な関係を保ちながら生きていかなければならない状況をも，巧妙にえがいている。恐しいことだが，虫をつめて妻を殺し，穴をうめて狐を殺す男，その男に呼ばれて穴から蜘蛛や虫を出すという狐，というところで最初の妻と，狐妻は同一物であるような描き方がされている。その妻（〝アニマ〟の一つの形）を殺してしまう男は，心のバランスを失い，最後には半狂乱になる。それから自殺という，自己の全面的な死を意味することにもなってしまう。しかし，このエスキモーの民話にあっては，殺された妻，狐，の身の毛のよだつような恐ろしい復讐の物語という形で表現されている。

(7) ディスコ島を移すこと

この物語の中では，赤んぼうの髪の毛一本のもつ不思議な力が先ず注目される。

綱をつけて引くというのは老人の考えだが，赤んぼうの髪の毛をこの国引きに使おうとする知恵と鋭い感にも驚かされる。勿論，この物語の中にも一種の魔法の力が大きな役目をはたすことになるのは他の物語と同じであるが，たった一本の髪の毛でしっかりと海底から生えているような大きな島を，この魔法の力を借りて引っこ抜いてじゃまにならない場所へ移そうといった，とてつもない漁民たちの考えが大変面白い。合理的な考えだけに動かされやすい現代人とは異って，素直で率直な心の動きをどんどん実行に移してゆこうとするエスキモーの勇気と，魔力を信ずる疑いを持たない純粋さも現代人のわれわれには愉快に思える。

さて，髪の毛に反対する力として銅の紐が持ち出されていて，銅の方は一応強そうに考えられるのだが，所詮，これは金属であり，そのもの自体の中に発展する力を含まないのである。一方，生きた人間の，しかもこれから成長してゆく生命力に満ちた赤んぼうの髪の方には無限の力と可能性がかくされている。それで，この国引きの物語は髪の毛の方が勝利をおさめることになる。銅の無力さと対照にされる髪の毛は，赤んぼうと共に，発展する力をもつもの，精神的エネルギーの根源として機能しているように思える。

一人の人間の心の中心とされる〝自己〟はよく子供とか赤んぼうという象徴となって，夢の中に現われてくることもあると言われ，また，多くの人がこんな夢の経験をもっている。これらのことを考え合わすと，将来に未知の世界を切り開いてゆく子供こそ，精神力の大きな根源とされ，その子供の髪の毛は何よりも強く，不思議な力を秘めているもので，この物語も，目にみえない，われわれの心の中の出来事とみれば，至極当然のこととして受け入れられるようである。

(8) 太陽と月

時は夏。久しく待ちこがれた太陽が見える季節になった。子供たちは大きくなって，もう家にはいない。淋しくなった家の中で一人ぽつんと夫の帰りを待つ妻の，ほんのりとした若い頃の思い出か，また，ひなたぼっこをしながらうたたねをしていた老婆の夢か，この物語はわれわれの想像力をかきたてる。

これは，現実と夢，過去と現在，老女と若く美しい女，男性と女性，兄と妹，天体と人間，生命と死など幾組かの対照が交錯し，混沌としているように思える物語である。

女性の内的体験が月と深いかかわりを持つことはよく知られており，前回に訳した，「月への旅」と称する民話（学報第52号・127～8頁）の中では，ある女性が月（男性）のところへ旅して子供

を授かる話であったが，この「大陽と月」では，妹の方が太陽，兄が月といった関係としてとらえられている。

もと人間の兄妹であったものが月と太陽となったと考えられ，しかもその兄妹はくらやみの中で男女の関係を結ぶ程，親密であった兄妹とされているところは，「月への旅」と相通ずるものを持っている。この「月への旅」では月は兄とまでは明確でないにしても，女性が子供をつくるために力になった男性であることはたしかである。

「太陽と月」では，自然と一体になって暮す，エスキモーの女性が，今まで地上の〝結婚〟は暗闇の中で行われ，相手は男性であれば誰でもよかった状態から，ある時ふと好奇心からか，相手が誰であるのか気になり出すというのである。それと共に暗い世界にランプがともされる。あるいは夏になる（昼間になる）といったことで象徴される意識の世界が，無意識（闇，冬）の世界から出て来る過程がはっきりと表現されている点は興味深い。

理性や合理性などで濾過される以前の混沌とした人間と自然の関係が，この物語の前がきにあたる部分では三羽の鳥が老婆に前ぶれに来たり，美しい女の話として語られたりする。女の話の中で最終段階において，妹の方が男女の関係というものを意識しだす明るい世界，夏が描かれ，二人が意識の世界で兄妹であることがわかり，地上での関係を終えて天へ昇る。しかし，〝みなし子たちを暖める〟という役目をもって，妹の方は手にもったランプを燃やし続けるというこの物語で，女性はすなわち太陽となる。

物語中の〝物語〟を語る若い美しい女性は，その物語の聞き手である，今は老いて，夫の帰りを待っている妻の若い頃の姿であったとも考えられる。話を終えて出てゆく彼女の背中がどくろになっていたということは，人間である限り，如何に若く美しくても死の印が背中にべったり押されているという人間の運命を意味するのか，あるいは，背中というところが，妹が兄につけたススの場所と同じであることから，若い男女の遊びが，はかなきものと化してしまったことを表わしているのかはわからないが，輝くような生の中に，すでに死のかげがひそんでいることを暗示するという，気味わるさを感じさせる。

物語の構成はしっかりしており，外側に老婆の現実の世界を一つの枠としてとらえ，その内側に若い美しい女の語る内的な世界の描写がある。

(9) 子供が欲しかった男の話

子供欲しさに，妙薬を執拗に求めて旅する男性が，家に帰り妻に与えるべき雌の干魚を食べてしまったばかりに妊娠し，口のきけない娘を産み下すという，とてつもない物語である。

その男は，食糧がなくなってしまい，ひもじくなったと大事な薬を旅の途中で食べてしまい，

皮舟（カヤック）に乗れないほど胴が太くなり妊娠だと知るところなど，薬の効き目は抜群で，食べたものが男であろうと女であろうと容赦のないところはユーモラスであり，また，雷鳥の足の骨や青い虫などをこすりつけて男の体に出口をつくるといったところは愉快である。

魔力の方が，生物的な自然の原始の法則をはるかに陵駕するところなどに，この民族の原始的な信仰の姿といったものがみられる。

物語の中に〝祖母〟とあるのは，夫に薬を横どりされた妻のことなのか，それとも娘の姑をさすのか明らかでないが，多分，後者であろう。子供を産むという女性の天性を奪い取った，けしからぬ男に対する女性全体の復讐心からなのか，この老婆は孫たち三人を殺してしまう。それが中指を切るという方法なのだが，それにどんな意味があるのだろうか…。

海岸に住むエスキモーたちは一般に，内陸には何か自分たちとは異なる不思議な形をした人（動物）が住み，海岸地方では理解しがたいようなことが起ると信じていたらしいことを示す民話が少くない。彼らにとって内陸はある未知の不思議な場所と考えられていることが，この物語の中にも読みとれる。

死んだはずの三人の子供はここでは元気に生きてボール遊びをしている。それも生きていた時に切り取られた中指を使っているなど，全く表裏の関係で，海岸の現実の世界と，内陸にみられた子供の死後の世界が描かれている。その内陸へと何かの力に導かれてやって来た母親の感の力と，そこでも子供を愛する力は大きいもので，その子供たちを連れて，彼らの父親のもとへ連れ戻すのである。

子供たちの父親は，世の父親と同じように，生きている子を可愛がることはするが，子供が死んだのには妻に何の罪もないことはわからない。すなわち，この父親は普通の人間の力しか持たない，平凡な父親として登場している。しかし，一代前の父は子供を生むという〝非凡〟な仕事をした。これはこの男自身がやったことではなく薬の魔力によるのであるが。

さて，その薬を彼に与えたのは，ある南方の地の老婆であり，孫を殺したのも一人の女（祖母）である。そして先程も述べたように，死の国から子を連れもどしたのは母親である。このように見ると，女性のもつ魔力，殺人をするほどの恐ろしいにくしみの心，子供が生きている国へ行く女性の感，父親のもとへ連れ戻す愛情など，一連の女性のもつ不思議な力が語られているとも受け取れる。

また，〝死と再生〟を感じさせるさまざまな力が，エスキモーたちの生活の中で，地方色，民族色を多彩にもり込んでこのような民話の形で語られているともいえそうである。

⑽ 置き去りにされた女とその養女

生活条件の非常に厳しいエスキモーの社会では，男女の仕事の分担がはっきりとしているようで，男性のみが海へ出て獲物を持ち帰り，一たん陸に上げられた後は，女性の手で処理される。したがって，男性がいないということは，みんなが餓死することを意味するのであろう。

この物語では，村のものが去り，世話になっていた男性にも見放された女が，その養女と共に如何にこの危機を乗り越えて生きるかという話である。

女は呪文を唱え，毎日，板の間の下に掘った穴から次々と上等の食糧を手に入れる。遂にあり余る食糧を確保する。しかし，他からやって来て，呪文にあずからなかった男に獲物を分ち与えたということで，折角，女たちを助けていた魔法が力を失ってしまう。

ここで最も興味を引くのは，〝魚たちの怒り〟にふれて，恩恵がすっかり失われるというところである。ここには魚にも霊魂があるとする精霊信仰の一端，アニミズムがうかがえる。

物語の成立には，困りはてた女性の強い願望と，彼女たちのイマジネーションがあずかったものなのか，それとも社会の男性側から，女性たちへの警告なのかはわからないが，人間の呪文や魔法の力と，食糧となる生きもの，(あるいは，それらを支配する海の神)との力のバランスが主たるテーマとなっており，最終は後者の勝利に終ることになるのである。

今回取り上げた七編の中で，「岩の精の助け」などには，エスキモーたちの信仰の対象となっている〝海神〟タカナカプサルクに帰依する男の姿がみられ，この海神の怒りにふれると獲物が減少したり，全然なくなったりする，と考えられている。(「シャーマニズム」14ページ参照) また，「ディスコ島を移すこと」でも，魔法の歌の力が大きいことが印象的である。「子供の欲しかった男」でも魔法の薬が物語をどんどん推進させるきっかけとなっている。そして，最後に取り上げた「置き去りにされた女とその養女」にあっては，魔法を使い呪文を唱えることが物語の中心となっている。

エスキモーの社会で重要な位置を占めているシャーマンの存在が，この最後の物語に特にリアルに描写されているのではないかと思われる。すなわち，穴の中に獲物を呼び出そうと必死に祈禱する女は全く，このシャーマンの姿であり，女と一体になって陶酔の境に入り，砥石のように見えるお守りを投げたりして，彼女の手足のようになって働く養女の姿は，シャーマンに唱和する村人たちを代表しているとも考えられる光景である。